第25号　20円
昭和46年8月25日

内　容

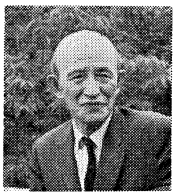
自己とは何か…… 1
大浜信泉氏が理事長に…… 2
共同セミナー委員会…… 3
昭和45年度決算…… 3
第37回大学共同セミナー…… 4
千人会…… 5
第38回大学共同セミナー…… 5
第3回大学教員懇談会…… 6
第39回大学共同セミナー…… 6
業務通信…… 7
この丘に寄せる心…… 8

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人　大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
電　話　0426-76-8511～2
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電　話　東京(270)4431
振替口座　東京74590番
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

自己とは何か

京都大学名誉教授
西谷　啓治



ものの見方、あり方には相手の存在が第二人称的に自分に関わってくるIch und Duと、人間以外の第三人称的な関わり方であるIch und Esが考えられる。第三人称的に存在に関わるという方向に例えば科学・技術がある。技術とは一言で言えば仕業であるが、人間が自然を征服するという行為の中に人為性が含まれ、そこに人間が自然から浮き上って問題をもってくる。このようにして技術の科学化――技術として純粋化してくる方向――がおこる。現代のテクノロジーの問題は、個々の人間存在そのものがテクノロジカルな性格をもってくるというか、人間のものの見方、行ない方が純粋化された技術の立場を自分の内から現れわし出してくるということであると思う。

マルティン・ブーバーの著わした"Ich und Du"は、哲学ばかりでなく多方面に非常に大きな影響を及ぼした。彼の根本の思想は、相手が人間であるか否かに関わらず、存在そのものに関わるということであるが、現代の抱えているこのような問題を、彼の思想を手掛りに考えてみたい。

この二つのものの関わり方とは例えば水についても考えることができる。地から湧き出て海に流れ蒸発して雲となり、雨となって地上に降るというように、水は我々の住む自然の世界を循環しており、水がなければ我々ばかりでなく動・植物も生きていくことはできない。その意味で水は我々の存在と自然とを根本的に結びつける一つの絆であり、いわば命の綱である、ということができる。滴水禅師が修業時代、掃除の後の水を何気なく捨てたところ、同じ捨てるなら木や草の根元に捨てろと師匠にひどく叱られたという有名な話があるが、ここには同じ水でもどうすればそれが生きてくるか、一滴の水の中にも我々を生かしている水の全体から、ひいては自然界全体を見るという考え方がある。

こうした考え方の一方には、水は酸素と水素の化合物であるとか、電力のエネルギー源であるといった物理、科学的なとらえ方がある。木についても同様であって植林された木をパルプ資源とみる見方には、個々の木、あるいは木の命という見方が薄れている。しかし木を育てることに生きがいを感じ、自分の存在をそこに託している本当の意味の植木職人にとっては、自分が手入れをして育て上げたその木であり、その木の存在のリアリティが人間にふれてくるのである。ある篤農家は自分には稲の言葉がわかると言ったが、本当の我と汝の関係の根本には対話があり、「ある」が同時に「語る」というように、そこではその木が存在そのものの言葉で語りかけてくる。それは存在と存在がそれぞれのリアリティにおいて出会うということで、近頃よく言われる出会いの根本も我と汝の関係である。そして、これは自己のあり方の問題なのである。

自己があるということは、自分において他のものの存在自身をリアライズすることであり、自分がある(I am)ということが本当に成り立つのは、他の存在がそのもの自身であって普遍化できない、つまり他ならぬその木というように個として絶対であることにおいて存在のリアリティをもつ場合である。自分があることと他者があることは一つであり結びついていながら、自分はどこまでも個として自分自身であり、他者は個としてそのもの自身であるということは、仏教的に言えば自他不二ということである。しかも我と汝の関係は根本においてお互いが現在し合っていることであり、根本のところへ帰ろうとすることである。そして他のものの根本のあり方を損なわないで本来の姿にかえるということは、実は前へ進むことである。

木は植木職人の仕事に応えて育ちながら、その存在のリアリティを常に新しく現わし、一方で植木職人はその仕事のうちに自分の存在のリアリティを一日一日新しく展開している。そこには仕事によって自分の存在が根本的に決められてくるという意味で、天職と言わないまでも、使命あるいは本分というような自覚がある。

このような本当の意味の職人は非常に尊い立場だと思う。どこかにキルケゴールの単独者の立場を含んでいるところがあると考えることができるが、現在のテクノロジーの世界ではあまり重きが置かれず忘れられている。しかし見方を変えれば、このような職人の存在はあらゆるテクノロジーの発展を迎え撃つようなものを含んでいる。世間一般には立派に通用する仕事であっても、自分には納得がいかない、損をしても満足のいくまでやりぬく、そこには自分を見るならこの仕事を見てくれというように、自分自身が仕事においてリアライズされていない時には一種の負い目を感じるのである。良心のやさしさとはこのような存在の自覚である。自覚とは知の意味

(二頁につづく)

長老大浜信泉氏が理事長として再度就任

一元化を図り館長も兼務

昭和四六年五月二八日
理事会・評議員会
銀行クラブにて

理事長高村象平氏と館長増田四郎氏は、かねてより一身上の都合により辞任を申し出ておられたのであったが、常務理事会は両氏のご意向を忖度し、辞意をうけ入れることとなり、五月二八日の理事会は後任者の選任を議題とした。

審議の結果茅誠司氏の提案を全員が賛成し、元理事長であり、本法人の創立に参画した長老でもある大浜信泉氏が、再度理事長に推挙された。しかし臨時の措置なので適任者を得て理事長を譲りたいというのが大浜理事長の強い要望である。

なお　新たに寄与行為を改正し理事長と館長を同一人にするか片方を廃止するかして、法人運営の円滑を図るため指揮系統の一元化を期しているので、機構改革問題は大浜理事長の重要な課題となるものと思われる。このような含みもあって、今回は大浜理事長が館長を兼務することとなった。

なお予算、決算のことがあるので、今回の理事会は、後半で評議員会と合同して審議を行なった。主な議事は、昭和四五年度決算、同四六年度予算、昭和四五年度事業報告、同四六年度事業計画などであった。

経常部会計の決算と貸借対照表は別掲の通りである(三頁)。

昭和四五年度利用成績

	セミナー 実施回数	宿泊者 実数	宿泊者 延数	会員校	その他	計
	回	人	人			
	433	8,307	12,944	310	22,202	743
		19,906	35,146	11,599		

協力会員校調

(昭和四六年四月現在)

専修大学が新会員校となる。

国立大学　一一校(　三五学部)
都立大学　一　校(　　五学部)
私立大学　二五校(　九七学部)
計　　三七校(一三七学部)

日本の大学数と東京都内の校数

区分		大学	短期大学	合計
国立		75	23	98
公立		33	43	76
私立		281	420	701
合計		389	486	875
東京都	国立	13	2	15
	公立	1	4	5
	私立	90	82	172
	計	104	88	192

理事会に小委員会を設ける

機構改革問題に対処して

本法人も創業時代から組織化の時代に入ろうとしている。創意と合意の中に運営されてきた草創期から脱して、公益法人としての形式期に入ったわけである。

昭和四六年五月二八日の理事会は大浜理事長を選任し、さらに左記の八氏を小委員に委嘱した。

大浜信泉、茅誠司、上代たの、春日井薫、団勝磨、中村哲、山内恭彦、加勝六美の諸氏

法人としての組織化、そして責任と権限の明確化を期することとなったわけだ。大学セミナー・ハウスの歴史の上で、この日の理事会は重要な意味を持つであろう。

小委員会は、大浜理事長が理事長嘱託として招いた清水辛氏に特命して、諸規程の原案作成を依頼し、意欲的に取りくんでいる。

新たに理事に迎えた

武蔵大学長　正田建次郎氏
上智大学長　守屋美賀雄氏
さらに評議員五氏を加える

昭和四六年六月二九日
理事会・評議員会
銀行クラブにて

懸案になっていた機構改革のための小委員会の報告をうけ、寄付行為の改正、給与規程などの重要議案を審議した。なお理事会においては、常務理事と新評議員を、評議員会においては新理事を決定した。

常務理事および新評議員は次の諸氏である。

常務理事

東京教育大学長　宮島龍興氏
(三輪知雄氏と交替して)

新評議員

朝日新聞論説委員　永井道雄氏
早稲田大学教授　川原栄峰氏
上智大学教授　鈴木　皇氏
東京工大教授　谷口　修氏
東京大学教授　向坊　隆氏

寄付行為の改正においては、理事長と館長を同一人にすること、この法人の業務を大別して二つの部門に分け、必要に応じては、二人の専務理事をおき、その業務を分担することができることとしたことが主な改正点である。業務の分担は次の通りである。

一、事業計画、セミナー、出版、広報、募金その他事業活動に関する事項。
二、人事労務、経理、施設その他館の管理運営に関する事項。

なお大浜理事長から就業規則の改正、給与規程の作成の方針などについて詳細に説明され、七月十日を目途に成案を急ぎ、四月にさかのぼって実施したいので、その取扱いを常務理事会に一任されたい旨を述べ、承認された。

(一頁より)

であり、自分自身を知ることは「ある」ということの自覚である。本当の自分になることが自分を知ることになる。

最後に、先にあげた科学・技術の問題にたちかえってみたい。医学を例に考えてみると、一つの自然科学であるという意味では、それの立場である。そこにおいては人間にとっては病理であろうと健康時の生理であろうと、どちらも自然現象に過ぎず、人間の欲求や感情をすべて切り捨てて冷静にありのままに見る、という一つの真理性あるいは非人間性の立場がある。しかし同時に医学には仁術という面があり、病人を救うという人間性の立場がある。技術があくまで仁術の手段である限り人間性と結びつくが、医学の発達によって人間のリアリティの立場から遊離して反人間的な方向に向っていく。公害とか環境汚染といった現象も、科学技術は非人間的でありながら、根本においては人間性と結びついていることを忘れ、独走することにある。

現代の社会における人間のあり方、ものの見方は、こうして我とそれの方向に大きく動いているが、これを正しく位置づけるためには、我と汝の考え方を原理的に、広く考えてみる必要があるのではないだろうか。

(「第38回大学共同セミナー」全体講義の概要、文責編集者)

共同セミナー委員会

旧企画委員会を継承して

企画委員会は大学セミナー・ハウスの建設計画を推進させるため昭和三七年一一月に理事会の下部組織として設けられた。

この委員会はセミナー・ハウスの未来像を検討し、青写真を眺め建設地を見聞し、地鎮祭を祝い開館式のプログラムを作成した。そしてセミナー・ハウスの独自の教育活動である共同セミナーを企画した。セミナー・ハウスの発展の中に占める企画委員会の役割は大きい。

小さな歴史ではあるが、時の経過は企画委員会の目的と性格を変化させた。

昭和四六年二月二五日の理事会は、企画委員会という名称が現状と実質的に一致しないことを認め、昭和四六年四月の新年度より共同セミナー委員会と改称することを決めたのである。

旧企画委員の中にも一身上の都合で、または学内のポストの異動で、あるいは海外出張とか健康上の理由などによって辞任を希望される方もあり、会員校の中でこれまで委員の出ていなかった大学に新たに委員をお願いするなど約半数が入れ替った。

この委員会の任務は共同セミナーの企画にあるので、六年間つづけてきた共同セミナーを現時点で、再検討し、大学の現状に即応したユニークなプログラムを展開してくれるであろう。

委員の諸先生は、左の通りである。

松田　智雄（東京大学教授）
柿内　賢信（東京大学教授）
○八十島義之助（東京大学教授）
芳賀　　徹（東京大学助教授）
○木村尚三郎（東京大学助教授）
川原　栄峰（早稲田大学教授）
○福井　文雅（早稲田大学助教授）
木原　　弘二（慶応義塾大学助教授）
○池井　　優（慶応義塾大学助教授）
星野　　命（国際基督教大学助教授）
竹内　啓一（一橋大学助教授）
宮崎　繁樹（明治大学教授）
徳末　安伊子（日本女子大学助教授）
根岸　愛子（東京女子大学教授）
吉田　夏彦（東京工業大学教授）
○世良　正利（中央大学教授）
○室　　俊司（立教大学助教授）
○宇野　重昭（成蹊大学教授）
○半谷　高久（東京都立大学教授）
○三輪　公忠（上智大学助教授）
○小西　甚一（東京教育大学助教授）
○戸川　　芳郎（お茶の水女子大学助教授）
○佐藤　　毅（法政大学教授）
○色川　大吉（東京経済大学教授）

外遊中につき未定

○印は新任・順不同

昭和45年度決算

（財団法人　大学セミナー・ハウス公告）

（昭和46年3月31日現在）

貸借対照表

借方 科目	金額	貸方 科目	金額
	円		円
（流動資産）		（流動負債）	
預貯金	35,449,241	予約金	874,910
現金	56,515	預り金	1,219,026
未収金	680,598	未払金	850,890
仮払金	61,600	借入金	59,413,600
（固定資産）		（基本財産）	
土地	134,694,853	基本金	2,000,000
建物	340,140,612	（運用財産）	
設備	4,450,440	退職手当積立金	1,797,280
構築物	588,000	職員厚生資金	2,000,000
什器備品	18,288,678	建物補修準備金	19,000,000
車輌運搬具	3,861,296	前年度繰越金	413,636,526
図書	2,201,053		
樹木	2,863,885	本年度剰余金	42,544,539
計	543,336,771	計	543,336,771

収支計算書

経常部

収入の部 科目	金額	支出の部 科目	金額
	円		円
財産収入	426,256	（一般経費）	
寄付金収入	3,584,477	事務費	40,859,070
会費収入	14,640,000	法人諸費	478,634
事業収入	35,476,407	土地建物費	4,875,186
雑収入	2,102,793	事業費	5,963,875
		（特別経費）	
		固定資産減価償却費	17,316,931
		当期剰余金	△13,263,763
計	56,229,933	計	56,229,933

寄付金報告

昭和46年4月～6月

ご支援を感謝して、拝受いたしました。

〔一般寄付者芳名〕

二、〇〇〇円　早稲田大学　市川ゼミ殿
二〇、〇〇〇円　日本航空電子工業株式会社殿
一、〇〇〇円　青山学院大学　原ゼミ殿
三、〇〇〇円　立正大学　杉沢ゼミ殿
三、〇〇〇円　専修大学　津田ゼミ殿
一〇、〇〇〇円　職業訓練大学新入生合宿ゼミ殿
三、〇〇〇円　東京農工大学　農芸化学科教官一同殿
五、〇〇〇円　都立大学教授　唄　孝一殿
四、一七〇円　京大名誉教授　西谷啓治殿
五〇、〇〇〇円　武蔵野電気通信研究所殿
一七、五〇〇円　東京理科大学電気工学科殿

〔指定寄付者芳名〕

♣植樹基金

二〇、〇〇〇円　市光工業株式会社殿
五、〇〇〇円　東京YWCA学院　本科オリエンテーション殿
四、五六二円　第三七回大学共同セミナー殿
六、六五四円　第三八回大学共同セミナー殿
三、一七九円　第三九回大学共同セミナー殿

♣職員退職金基金

三〇、〇〇〇円　旧職員　飯田　栄殿

第37回大学共同セミナー

新入学生歓迎セミナー

主題　学問と人生——大学における出会いの意味

期日　昭和46年5月22・23日

〈全体講義〉

学問と人間形成

東京大学教養学部長　山下　肇氏

〈セクション演習〉

A　人文

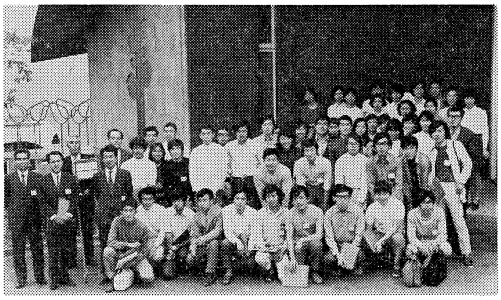
国際基督教大学助教授　原　一雄氏

B　社会

成蹊大学教授　宇野　重昭氏

C　自然

東京工業大学助教授　道家　達将氏



〈プロジェクト・リーダー〉

若菜智、吉田淳子、林雅彦、吉田園子、新井健、小沢婦貴子、柴田道人、東俊郎、萩原清子、田中潤一、鷺見香代子

〈参加学生〉

日女大(七)、早大(五)、一橋大(四)、慶大(四)、ICU(四)、東工大(二)、中大(二)、青学大(二)、明学大(二)、津田塾大(二)、聖心女大(二)、東京農大(二)、お茶の水女大、都立大、明大、立大、共立女大、東洋大、武蔵大、奈良女大、千葉大、学習院大、和光大、共立薬大、麗沢大、桜美林大（各一名）（二六大学）

注＝プロジェクト・リーダーを含む。

＊

四二年から毎年行なっている新入学生歓迎セミナーは、当ハウスの特異な教育活動として、すっかり定着したが、今回は奉仕グループの学生がプロジェクト・リーダーというかたちで、企画をたて、先生方と演習内容などについて事前に連絡をとりながら準備を進め、会期中は先輩として新入生の世話、講義、シンポジウム等の司会、セクション演習の進行係などかなりの部分を担当した。今までにも学生による自主セミナーは幾度か行なわれたが、今回のように、共同セミナーに組み入れプロジェクト・リーダーという役割を明確にしたのは初めてであり、セクション指導の先生方や参加学生にも好評であった。特定の専門分野にとらわれない新入生セミナーなどの場合には、企画、運営面での学生参加がかなり可能かつ有効であることを示し、今後の共同セミナーの一つの方向性を示した試みであったといえよう。

プロジェクト・リーダーとして

新井　健

「私達が大学セミナー・ハウスから迎えられたように、今年もぜひ、新入生を八王子の出会いの丘に迎えよう」この気持を抱いた学生達が、新たな試みとして、プロジェクト・チームを組織して今回の新入生セミナーに企画の段階から参加してみました。

幸いに五月の好天に恵まれたセミナーの二日間は、新入生の諸君の真摯で意欲に溢れた姿勢と、それを受け止め指導してくださった先生方の熱意に支えられて、大変充実したものとすることができました。

Cセクションのリーダーとして演習にも加わりましたが、新入生諸君の鋭い問題提起、その新鮮な大学や学問に対する見方に触れ、大学での生活が永くなってゆく内に鈍化していた、あの感覚がよび起されるのを感じるのでした。

そして、この二日間のセミナーで、掘返された自己を見つめ、自己の前に提起された問題に取り組んでゆく新入生諸君とともに、私も全く同じ問題に対峙してゆかなければならないと痛感しました。

うぐいすの声を聞き、丸木に腰かけての森の中での野外セミナーは、自然に触れながら、じっくり語り合うという、セミナー・ハウスならではの、人と人、自然と人との暖かな結びつきを感じさせてくれ、楽しい時のうちに忙しさも忘れて過ごした二日間でした。

私達の希望をかなえてくださったセミナー・ハウスに感謝すると共に、今回のような学生の参加を共同セミナーに採用されることを願ってやみません。

（東京工業大学三年）

あの丘でのこと

真下　峯子

自分で望み憧れて入った大学に裏切られたと感じはじめ、いろいろな焦燥感を持って共同セミナーに参加した私でしたが、そんなことなど吹き飛ばしてしまうようなすてきなことを見つけることができました。同じ一年生があんなにも一生懸命に生きようとしていること、社会に向かって働きかけていることを知りました。

観光地奈良の表面だけは明かるいけれど、中味はもの憂くけだるい雰囲気に埋没し、寮に閉じこもっていた私の中に、もっとしっかりと生活しなくてはいけないのだ、沢山の本を読んで友達といろんなことをして、そして自分にとって一番大切な生物を徹底的にやるのだ、という気持がわいてきています。昼食会の時に指名されて、「ただうれしいんです」とだけしか言えなかった私、こんなに時間がたった今、また聞かれたとしても、そうとしか答えられないだろうと思います。

ただのスピーカーだと思っていた大学の先生が、あんなにも私たちと一緒に話し合い、考え合ってくれた。デクの棒のライティングマシーンだと思っていた学生が、いろんなことを出し合って話し合った。自分の大学に求めようとしても決して求められないとあきらめていたものに会えたからなのです。それが自分の大学でなくとも、何らかの形で存在していたことが、とても嬉しかったのです。

奈良に帰ってきて自分達の所もどうにかしようと頑張ってはみたものの、ゼミ室のない学校では、できるのはコンパぐらい。

なかなか自分の思うように活動できないで、またあのじめじめした焦りにとらわれてしまっている私だけれど、あの丘でのこと、あの新鮮さをいつまでも大切にして、どうにか乗りこえていくつもりです。

（奈良女子大学生物科一年）

千人会満願への道はけわし

Together in Completing 1,000 Supporters

現在会員 570人 ｛ 大学人 439人 / 社会人 131人 ｝

□千人会のご入会を感謝します

第14回報告（申込順）

C　鶴見女子大学助教授　井村　君江殿
C　専修大学教授　望月　清司殿
B　成蹊大学助教授　黒田　道雄殿
B　東京理科大学教授　岡本　剛殿
A　学習院大学助教授　荒井　良雄殿
B　東京学芸大学教授　松原　元一殿
C　東京教育大学助教授　高橋　恒郎殿
C　一橋大学教授　良知　力殿
C　東京都立大学助教授　稲垣　寛殿
B　法政大学教授　岩下　秀男殿
C　明治大学教授　池上　秋彦殿
C　東京大学助教授　鈴木　博殿
C　九州大学助教授　中島　直忠殿
B　都立工業短期大学教授　小田中敏男殿
B　上智大学教授　岡田　純一殿
C　東京大学講師　奥野　忠一殿
C　玉川大学助教授　彦由　一太殿
C　日本学士院会員　赤堀　四郎殿
C　立教大学講師　平木　典子殿
B　東京都立大学教授　太田　秀通殿
C　早稲田大学教授　加藤　栄一殿
C　東京外国語大学学長　鐘ヶ江信光殿
B　学習院大学教授　大川　章哉殿
C　日本大学名誉教授　金丸　重嶺殿
A　東京学芸大学教授　三橋　文雄殿
C　東洋大学教授　泉　治典殿
C　文京女子短期大学学長　島田依史子殿
C　青山学院大学助教授　手塚　喬介殿
C　東京都立大学教授　野間　三郎殿
C　早稲田大学助教授　横山　宏殿
（以上三〇名）

第38回大学共同セミナー

主題　自己とは何か――セーレン・キルケゴールの思想を手がかりとして

期日　昭和46年5月29～31日

〈全体講義〉

Ⅰ自己とは何か
京都大学名誉教授　西谷啓治氏

Ⅱ S・キルケゴールの生涯と著作から
東洋大学教授　桝田啓三郎氏

〈セクション演習〉

A　イロニーとしての自己――「イロニーの概念」をめぐって――
埼玉大学助教授　福島　保夫氏

B　パトスとしての自己――「おそれとおののき」をめぐって――
お茶の水女子大学助教授　柏原　啓一氏

C　例外者としての自己――「反復」をめぐって――
高崎経済大学助教授　三浦　永光氏

D　不安に生きる自己――「不安の概念」をめぐって――
東京神学大学教授　能沢義宣氏

E　ユーモアに生きる自己――「哲学的断片」をめぐって――
慶応大学助教授　大谷　愛人氏

F　絶望に生きる自己――「死に至る病」をめぐって――
東京女子大学教授　小川圭治氏

G　出会いにおける自己
東京大学助教授　杉山　好氏

〈ゲスト講演〉

評論家　吉本　隆明氏

〈参加学生〉

一三四名（うち女子六三名）
早大（一五）、お茶の水女大（一一）、中大（八）、東京外大（七）、日女大（六）、東大（五）、共立女大（五）、東洋大（五）、都立大（四）、津田塾大（四）、聖路加看護大（四）、東女大（三）、慶大（三）、上智大（三）、専修大（三）、岐阜大（三）、奈良女大（三）、東京学芸大（二）、農工大（二）、立大（二）、青学大（二）、明学大（二）、成蹊大（二）、武蔵大（二）、埼玉大（二）、独協大（二）、国学院大（二）、玉川大（二）、和光大（二）、東海大（二）、横浜国大、ICU、武工大、東京理科大、東京慈恵医大、東経大、学習院大、聖心女子大、立命館大、国士館大、東京農大、東京神大、麗沢大、東京YWCA学院、その他各二名（四四大学）

主題の主旨

われわれは今、一九七〇年をめぐる大学の激動ののちの荒廃の中に立っている。そこでわれわれがいやおうなしに直面する問題は、学生として、大学人として、学問の研究に向かい、また人間として生きる場合の根本的な出発点は何かという問いである。

S・キルケゴールは満二二歳に近づく春頃から夏にかけて、深い精神的危機に見舞われる。彼は八月一日（一八三五年）の日記に次のような言葉を書いた。「私に欠けているのは、私が何をなすべきか、ということについての私自身の決意なのだ。私が何を知るべきかということが問題ではない。……私にとって真理であるような真理を発見し、私がそれのために生き、そして死んで悔いのないようなイデーを発見することが必要なのだ」。これは、その後の彼の思想が生まれ出る出発点にある原体験であり、若き日の自己との最初の出会いの瞬間だったといえるだろう。このようなキルケゴールの思索と体験は、われわれの原点は何かを問おうとするよき道しるべとなるであろう。

＊

第三三回共同セミナーは「思想の主体性」という主題の下に、キルケゴールを取り上げ大変好評であったので、現代人の自己認識を深めるため、もう一度キルケゴールを学ぶことにした。しかも今回はキルケゴールの生誕月である五月を選ぶという綿密な企画が、小川、杉山両先生によって、実施されすばらしいセミナーが行なわれたことは幸わせであった。今回のセミナーの特色は、京都から大哲学者西谷先生を招くことができたこと、また、キルケゴール学者の桝田先生の独創的な講義をきくことができたことであった。（六頁へ）

第3回 大学教員懇談会
——大学改革の反省と展望——
充実した天城文部次官との対話
昭和46年5月15～17日

去る二月の第二回懇談会の主題「大学改革の現時点」をうけて、もう一度同じテーマを取り上げ、中教審答申も最終段階に達したこの時点で、各大学の改革の現状を反省し、今後の方向を展望するため第三回の懇談会を企画した。

この懇談会をして大学の中に位置づけるための方策、それは大学間交流の問題であり、単位の交換であり、セミナー・ハウスでの共同講義であり、教授連合の問題であるが、それらについての協議も活発に行なわれた。

運営委員は、前回に引き続いて東京工業大学慶伊富長教授、中央大学村田喜代治教授、慶応大学山本敏夫教授に、新しく成蹊大学広野良吉教授、津田塾大学井門富二夫教授、早稲田大学勝村茂教授をお願いして、プログラムの編成と当日の運営に当っていただいた。

今回も読売新聞（四六・五・二五日付）は「盛んになる大学間交流—大学教員懇談会で討議—」という表題で詳細に紹介してくれたが、国公私立大学教員の共通の対話の場が必要であることが明らかになったようである。生産的な討議の積み重ねが、明日の大学づくりにどこかで役立つからである。

第四回の開催日を決定し、世話人を選出して三日間の共同生活を終った。

懇談会の内容と大学別出席者数は次の通りである。

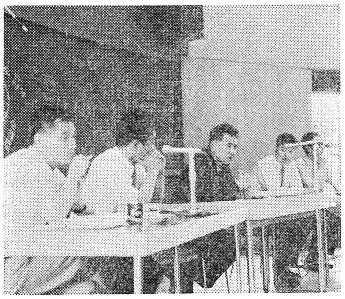
なお今回も過去二回と同様、記録として当ハウスから刊行することになっている。

＜シンポジウム＞
「日本における大学改革の反省と展望」
▽大学改革の現時点
文部次官　天城　勲氏
東京大学教授　柿内　賢信氏
▽大学間の交流について
Ⅰ工学系大学院を例として
東京大学教授　岡村　総吾氏
東京工業大学教授　谷口　修氏
Ⅱ英文学系大学院を例として
上智大学教授　刈田　元司氏
Ⅲ学外セミナーを各大学が公認するための問題点
国立教育会館館長小塚新一郎氏
＜参加者＞　六〇名
東工大(六)、農工大(五)、明大(五)、東教大(四)、電通大(四)、上智大(四)、中大(四)、法大(三)、津田塾大(三)、東大(二)、東外大(二)、日大(二)、立大(二)、武工大(二)、成蹊大(二)、ICU(二)、東経大(二)、横浜国大、早大、慶大、東京理科大、文部省、国立教育会館(各一名)

第39回大学共同セミナー

主題　人間と環境——公害の現状と展望
期日　昭和46年6月25～27日

＜全体講義＞
人間と環境
埼玉大学学長　和達　清夫氏
＜セクション演習＞
A　経済
中央大学教授　村田喜代治氏
B　法律
東京都立大学助教授　野村　好弘氏
拓殖大学講師　木村　実氏
C　技術
東京工大助教授　道家　達将氏
D　生物
慶応大学助教授　木原　弘二氏
＜ゲスト講演＞
前東京電力副社長　白沢富一郎氏
＜参加学生＞
四六名（うち女子一六名）


和達先生(中央)を囲むシンポジウム風景

日女大(六)、中大(五)、一橋大(三)、慶大(三)、専修大(三)、お茶の水女大(二)、都立大(二)、埼玉大(二)、群馬大(二)、和光大(二)、東大、早大、明大、東女大、武工大、明学大、東京理科大、拓大、信州大、静岡大、東北大、成城大、東海大、東京農大、独協大、聖路加看大(各一名)（二六大学）

主題の主旨

人間は機械を発明し、文明社会を築いてきた。

しかし機械の利用は物的豊かさを与えてくれる反面、人間の生活を危機に陥れようとしている。科学と技術の濫用は人間の健康をむしばみ、環境を侵しつつある。かくて私たちは科学と技術の発達がもたらした成果と意義を問い、また科学と技術を濫用してきた社会のしくみを反省して新しい方向を模索する必要に迫られている。

そこで社会のしくみ即ち経済の機構、公害問題に果たしうる近代市民法、社会のしくみによって制約されつつも人間の意志によって開発され利用される技術、社会的制約とともに人間の本質からくる生物的制約など、自然、社会両科学にわたる四つの方面から、公害問題の根底をさぐっていきたい。

＊

運営委員長には、村田先生を仰ぎ、企画から運営まで全般にわたって、精力的なご奉仕をいただいた。和達先生の全体講義は生態系のバランスについてのかなり専門的な内容であったが、後半は具体的な公害対策基本法についてふれられ、さすがに公害の先達者的学者の重量感にあふれた講義と積極的な態度に先生のお人柄が感じられひきつけられた、という学生の反響が多かった。またゲストの白沢氏については、企業が実地に取りくんでいる体験を聞くことができて非常によかった、良識者を知って上部指導者に対する認識を高めることになったという学生の声が多く、人選についても好評であった。テーマがテーマであるだけに、とかく対立しやすい立場の者が、十分とはいえないまでも理解し合うという姿勢がとられたということからも、あらためて若い学生に、社会人との対話を提供する場としてのセミナー・ハウスの役割を確認したセミナーでもあった

（五頁より）さらに学生の興味をひいたのは、大学教授でない吉本氏に登場してもらったことである。

一つ一つ言葉をしぼり出すように話される様子に、学生の多くは「人間くさく親しみを覚え、非常に感銘した」という感想を寄せていた。

業務通信

鮮やかにそして逞しい緑に統一される四月半ばから二ヵ月間は、新入学生のための大規模なオリエンテーションの利用が多い。新緑の丘は瑞々しい若人に溢れ、あちこちの芝生、ベンチに人の輪ができる。平常は静まりかえっている講堂も、この季節はその存在の効果を十分に発揮するのである。

今年もまた左記のように、数多くのオリエンテーションが実施された。

▽四月

一三～一四日　東京医科歯科大学
一五～一六日　立教大学観光学科
一六～一七日　都立航空短大
二二～二三日　東京ＹＷＣＡ
二四～二五日　学芸大学音楽科
二四～二五日　日本女大社会福祉
二五～二六日　早稲田大建築学科
二七～二八日　東京ＹＷＣＡ
二八～二九日　学芸大特殊教育科
三〇～一日　都立工短機械工学

▽五月

八～九日　学芸大学数学科
一〇～一一日　都立立川商科短大
一一～一二日　都立立川短大
一二～一三日　東京理大応用化学
一三～一五日　白梅短大保育一部
一五～一六日　白梅短大保育二部
一七～一八日　文京女子短大Ａ班
一八～一九日　文京女子短大Ｂ班
一九～二〇日　東京理科大化学科
二一～二二日　津田塾大学　Ａ班
二四～二五日　職業訓練大学校
二八～二九日　津田塾大学　Ｂ班
三〇～三一日　東京農工大農芸化
三一～一日　都立大学経済学科
三一～一日　都立大学法律学科

▽六月

一～二日　東京理大工業化学
一～二日　都立大学人文学科
四～五日　津田塾大学　Ｃ班
五～六日　学芸大、学校教育、歴史、国語、数学
七～八日　順天高等看護学校
一三～一四日　東京理大物理学科
一八～一九日　東京ＹＷＣＡ
一九～二〇日　学芸大学、理科教育、幼稚園教育

▽七月

二～四日　お茶の水女子大学
一一～一三日　電気通信大学短大

東京医科歯科大学 初めての試み

――新入生校外オリエンテーションを実施して

一泊二日の日程で参加者（新入生一五四名――入学者の九五％、教職員三〇名）全員による全体集会、医歯両学部別集会および班別集会を開き、特に班別集会では両学部、教養部の各教官がそれぞれ一名ずつ出席してアドバイザー的役割を果たしながら、医学、歯学および教養課程について理解を深め、新入生相互の親睦をはかろうと企画した。

この校外オリエンテーションの結果のアンケートからみると、開催場所については九七％が適当と判断しており、景観、雰囲気などについて高い満足度が示されている。

また合宿についても九四％が適当としてその意義を認めており、期間については一泊二日を可とするもの六〇％、三五％がそれ以上の期間を望んで、かなり積極的であった。

さらに前記の三種の集会については、多少とも肯定的評価をしている者まで含めると、いずれについても七〇％の者がその意義を認め、総合的評価では九七％以上がなんらかの意義のあったことを認める認定を下している。

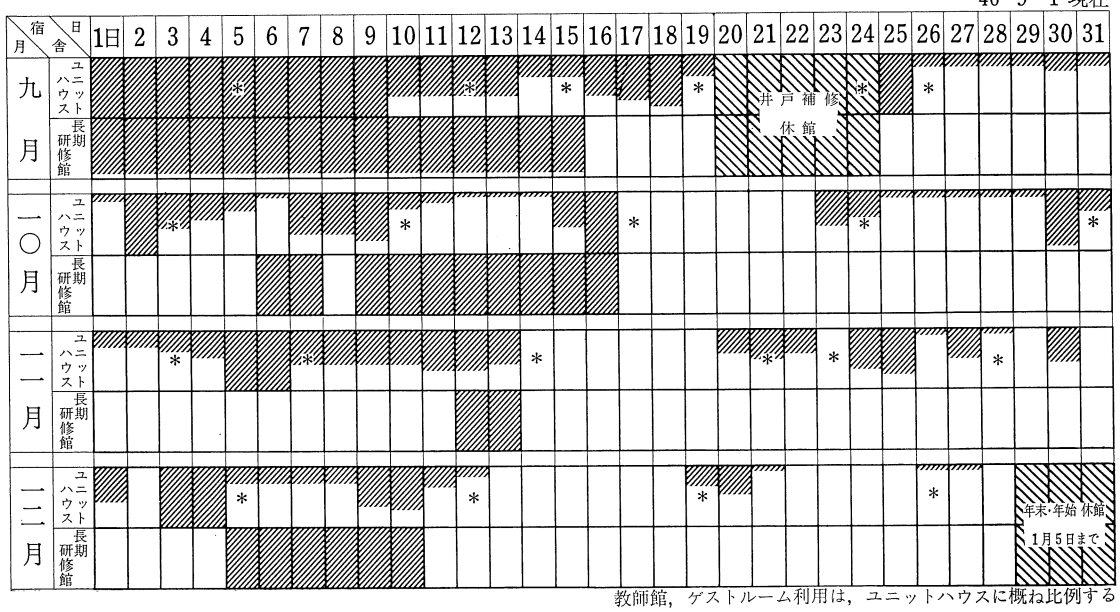
要するに、今回の校外オリエンテーションについては、本学としては初めての試みであったが、一応成功と判断してよいと考えられるわけである。ただ、アンケート結果をさらに詳細に分析し、経験の中から貴重な教訓を読みとり、このような行事そのもののもつ意味、機能をより理論的に掘り下げ検討することも怠ってはならないであろう。

東京医科歯科大学教養部教授
篠原　武夫

昭和46年9～12月申込状況

▨予約済　＊日・祭日
□申込受付中

46・9・1現在



教師館，ゲストルーム利用は，ユニットハウスに概ね比例する

第五回大学英語教育学会夏期セミナーを終って

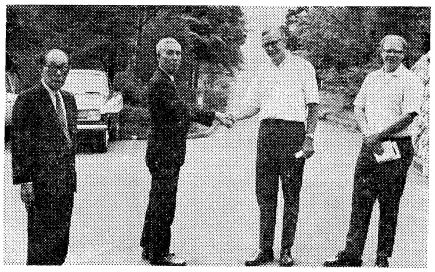
事務局長 筧 寿雄

七月一二日から始められた当学会夏期セミナーは、二八日無事一七日間の日程をおえた。外人講師五名、日本人講師四名、受講者は全国大学の教師二九名であった。

セミナーの目標は、「大学における英語教育の改革」「言語理論と英語教育」「英作文などによる英語運用能力の向上」であった。

第一の目標について、参加者全員が各自の問題を英語スピーチの形で発表し、討議を重ね、最終的には七月二七日の公開討論会において、外部からの識者の批評も仰いだ。今回の討論会において特徴的であったのは、教育改革の問題がすでに提案の段階を終り、各大学がそれぞれの形において、改革を実施中であるということであった。もちろん、結論にはほど遠い。しかし改革の潮流は強く広く行きわたっている。その目指す方向は、現在世界において国際語としての性格を持つ英語を、生きた言語として、立体的・綜合的に教授するということである。このセミナーから巣立った参加者の数はまだ一五〇名に過ぎない。これは全国大学英語教師の数からすると、ほんの一握りであろう。しかしこの一握りの麦粒が各地の土壌に根を下し、今後逞しく成長し続けるであろうことは信じてよい。

第二・第三の目標については、今回はたいそう優れた講師に恵まれ、研究の目的はじゅうぶんに達せられた。教育においてもっとも重要なことは、教師自身が旺盛な研究意欲を持ち、絶えず研鑽を続けることである。こうした講師の態度そのものが、百の教授法にまさって、学生の心に火を燃えさせるものとなるであろう。



旧交を温め、再会を約すクラニヤン博士と飯田専務理事。左・大浜理事長、右・マーク・レスター博士

July 24. 1971

Dear Mr. Iida:

It has been a pleasure for me to spend this past week at the Inter-University Seminar House. For me, it was a wonderful break from the busy-ness of my work at the East-West Center. I had time to work and found the atmosphere good for getting work done.

So, thank you for all your help. I hope the Seminar House continues to flourish. I must say I am impressed by the member of people who come and use the facilities and the apparent seriousness with which they go about their task.

Best personal regards

Yours truly,
Everett Kleinjans
Chancellor of East-West Center of Hawaii Univ.

この丘に寄せる心

海外から、関西から……

当学会の最大の特色としては、このような合宿制によるセミナーを毎年度実施しているということである。俗に言う、「同じカマの飯を食う」ということは、血の通った人間関係を造り出し、参加者は、心ゆくまで各自の問題を論じ合うことができる。しかし、このようなことが可能であるのは、とにもかくにも、この大学セミナー・ハウスのような優れた施設があるからである。「まさにそのことを意図しているのだ」と飯田専務理事は言われるであろう。

セミナーを終た今、私は長命眉の奥にやさしく、きびしく光る同氏の眼差を思い浮べている。

（神戸大学助教授）

学生から職員への道

業務課職員 松永 豊

大学共同セミナーでの貴重な体験は、セミナー・ハウスへの就職を思いたたせた。それほどに大きくすばらしい体験であった。学問の深さ、人間的な広さ、大きさを実体として示してくれた先生との出会い、そして真摯に何かを求めて参加している学生達、そういう人人とのめぐり会いが、一大学を越えた場として、八王子にあったということは大きな喜びであった。

私は一ぺんで、大学セミナー・ハウスに惚れこんだ。しかし、仕事の場というものは大変なもので、いわば毎日が舞台裏の縁の下の力持ちみたいなことをやっているわけだから、地味で苦労も多い。利用者と施設との板ばさみになって苦しむ時、私はこの八王子の丘の自然の美しさに心を慰めてもらう。桜、つつじ、マーガレット、あじさいと美しい花の咲き乱れるこの丘は、うぐいすの声が絶えたこともないし、これから夏、秋とかけてどんな花がここを彩ってくれるか楽しみである。

新入生のオリエンテーションの多かった四月から、各種のゼミナール、そして共同セミナーとここ八王子の丘はいろんな人が集り、散じてゆく。たとえそれが数日間の単純な応待であっても、やってきた人の〝人となり〟というのはいつまでも記憶に残って私の中で生き続ける。それは具体的に存在する〝人〟が何よりの自分の鏡であり又対象化しうるものだからに他あるまい。人から学ぶこと、教えられること、力づけられることは数えきれないし、そういう相乗性に富む関係体を実現したのが大学共同セミナーではなかろうか？というのは、その極めて多様な異質性のぶつかりの場所としてそれがあるからである。四〇以上もの大学の専攻分野も学年も違う人が東北や関西からまでやって来る、というその事実に私は大きな喜びを感じ、その担ってきた過去の違いを披露し合い、時には闘かわせ合う時、そこには何かが生まれずにはいないはずである。名古屋から、あるいは静岡や奈良からやって来た友の輝いた目を決して忘れることはないだろう。

五年間もの間美しい部屋を維持しつづけてくれた掃除のおばさん達の努力に感謝の念をもって報いる最善のことは、思い出多き収穫ある場としてここを生かすことにつきる。何事でもそうであるが、講義にしろ質疑にしろ、また人とのやりとりにしろ、聴き手、読み取り手にかかっているとすれば、参加する人の主体性こそ充実の鍵であり、求めてきた人には、数限りない贈り物をくれる泉のごときものが共同セミナーの場であるこ八王子の丘、大学セミナー・ハウスであると思う。

第五回 会員校事務連絡会

昭和四六年六月九日

昨年の梅雨の大雨にこりて、今年は期日を早め、会場も当ハウス本館三階ラウンジにおき、午後三時より二二校、四一名の出席を得て行なわれた。

自己紹介の後、飯田専務理事の開会の挨拶と全体報告、関係各課の報告の後、座長に東京医科歯科大学の佐藤明人学生課長を推し、懇談会に入った。

◇　教師と学生との対話――学生に対する理解と愛情を深めるため――の場所として、ここセミナー・ハウスは好適である。

東京都立大

（ちなみに、都立大は毎年利用回数のトップを占めている）

◇　料金改正は学生ノート作成に間に合うよう、早目に決定されたい。

中央大、医科歯科大

◇　幹事校制を設け、共同セミナー、諸連絡、運営等に積極的に協力したらいかが。

中央大

◇　新入学生オリエンテーション実施の結果、セミナー・ハウスを選んだことは成功に役立った。

立教大・医科歯科大

五時すぎ閉会、懇親の晩餐会場を食堂に移し、六時二〇分散会した。

当日の出席者（略敬称）

東大（森川村彦、宮川幸悦）、一橋大（手塚粂雄、小室正巳）、東工大（日高司朗）、学芸大（吉原定行、中山　昭）、医歯大（佐藤明人、井上長雄）、農工大（仲　俊夫、和地太郎）、外語大（津脇孝子、関根正夫）、都立大（山本満志、岡部雅明、遠藤洋子、松村総七郎、斎藤美代子）、明大（山本高義、上西勝巳、小川高志、長岡　功）、中央大（天野成光）、青学大（城島宗孝、岸実）、立大（渡辺隆司、進藤絹子）、武工大（川島辰雄）、明学大（玉井一郎）、成蹊大（篠原直俊）、津田塾大（田上和子）、順天大（上西守夫、東　文昭、井上一雄）、ＩＣＵ（池田　篤）、理科大（横川幸弘）、東経大（水津嘉視、岩崎　晃）、専修大（高山俊一、吉沢正信）、武蔵大（須田広志）

なごやかな懇談、座長は佐藤明人氏（中央）

利用状況

……四　月

早稲田大学教授　市川　孝正
成蹊大学教授　安藤　英治
独協大学講師　宮川　淑
明星大学講師　川野　幹雄
川鉄商事新入男子社員教育
慶応義塾大学助教授　村田　昭治
学習院大学教授　佐藤　正滋
東京キリスト教短大実践神学ゼミ
日本航空電子工業集合教育
市光工業新入社員教育
日本ワークデザイン協会研修会
一橋大学小平祭実行委員会
慶応義塾大学モデル研究会
東洋大学ガイド研究会
明治学院大学助教授　増田　茂樹
法政大学講師　粕谷　信次
東京経済大学助教授　田中　章義
一橋大学キリスト教青年会
光印刷ＦＣ合同研修会
明治学院大学講師　鈴木　守
東京経済大学教授　坂野　観司
慶応義塾大学教授　石川　忠雄
日本大学教授　川西　誠
明治大学教授　河野　一英
法政大学教授　霜島　甲一
東洋大学助教授　今井光太郎
東京医科歯科大学新入生オリエンテーション
中央大学教授　小川浩八郎
立教大学観光学科春季合同集会
東京教育大学助教授　岡本　敬二
日本女子大学ＥＳＳ
東海理科電機製作所
東京都立航空短大新入生オリエンテーション
東京大学応用微生物研究所
富士電機寮監特別研修会
中央大学教授　細野日出男
川鉄商事課長セミナー
東京ＹＷＣＡ学院本科オリエンテーション
聖心女子大学教授　内藤　智秀
東京大学宇宙航空研究所
国際キリスト教大助教授　原きみ
東京学芸大学音楽科合宿
日本女子大学教授　一番ヶ瀬康子
早大新入生オリエンテーション
武蔵工業大学教授　広瀬　鎌二
立教大学教授　野田　一夫
東京学芸大学助教授　小川　仁
東京農工大学助教授　金子　六郎
千葉商科大学心理学西ゼミナール
立正大学教授　杉沢　新一
青山学院大学助教授　原　豊
東京経済大学講師　田坂　元
東京都立工業短大新入生研修
由木団地建設会
東京都建設局
慶応義塾大学講師　中込　昌孝
白梅学園短大教授　田中　未来

……五　月

東京学芸大学英米文学研究会
中央大学教授　多賀秋五郎
一橋大学助教授　竹内　啓一
中大経済学部ゼミナール連合会
バッハ合唱団（東大バッハゼミ）　杉山　好
専修大学教授　津田　昇
日本ＷＦＡ研修会　林　貞子
大東文化大学教授　河野　一英
日本福音自由教会
武蔵工業大学教授　広瀬　鎌二
専修大学教授　望月　清司
東京工業大学イアエステ
専修大学教授　内田　義彦
全国大学耳鼻咽喉科医局員連絡の会
法政大学教授　白井　慎
お茶の水女子大教授　外山滋比古
早稲田大学憲法判例研究会
東京工業大学教授　内藤　正
法政大学助教授　五味　健吉
白百合女子大助教授　高橋　康子
都立工業短大生産管理学科（新入生オリエンテーション）
慶応義塾大学機械学科熱工学研究室（新入生歓迎セミナー）
東京経済大学助教授　市川　深
学習院大学シェークスピア劇研究会　児玉　久雄
津田塾大学生活協同組合
東京学芸大学数学科（新入生歓迎セミナー）
東京大学助教授　岡本　康雄
都立商科短期大学交歓会
新生活運動協会（新任担当者研修会）
川鉄商事（課長教育セミナー）
都立立川短期大学（新入生歓迎セミナー）
東京都立大学助教授　高田　清朗
東京大学教授　松田　智雄
アラスカメソジスト大（歴史研究）
東京理科大学化学科（新入生オリ

エンテーション）
白梅学園短期大学保育科（新入生オリエンテーション）　彦由　一太
玉川大学助教授
津田塾大学合気道部
第三回大学教員懇談会
SECTY会　江崎　信治
文京女子短期大学全学生研修会
東芝電算機教育研修部
中央大学教授　佐竹　寛
津田塾大学フレッシュマン・キャンプ
第37回大学共同セミナー
明治学院大学助教授　竹内　真一
共立女子大学短大文科二年クラス学習　内田市五郎
立教大学教授　武沢　信一
明治大学教授　内田　章五
慶応義塾大学教授　中鉢　正美
慶応義塾大学講師　野呂　影勇
日本電々公社武蔵野電気通信研究所（研究管理者訓練）
慶応義塾大学教授　千住　鎮雄
職業訓練大学校新入生セミナー
農村伝道神学校保育科（オリエンテーション・修養会）
法政大学講師　良知　力
横浜国立大学助教授　平出　彦仁
東洋大学経済学会
東京経済大学教授　中村　金治
慶応義塾大学教授　村井　実
早稲田大学講師　中根甚一郎
第38回大学共同セミナー
立教大学教授　牛窪　浩
東京農工大学農芸化学科新入生オリエンテーション
東京都立大学経済学科新入生オリエンテーション
都立大法学部新入学生ガイダンス

……六　月

東京都立大学教授　林　栄夫
東京都立大学教授　辻　正三
東京理科大学工業化学科（新入生オリエンテーション）
東京都立大学教授　山本三三三
津田塾大学フレッシュマン・キャンプ
東京都立大学教授　小笠原直幸
目白学園女短大教授　片山　清一
立教大学教授　三戸　公
東京学芸大学助教授　永野　賢
東京学芸大学史学科（新入生合宿研修）
東京学芸大学学校教育学科（新入生合宿指導）
東京学芸大学教授　清宮　俊雄
東京大学教授　工藤　篁
慶応義塾大学教授　小茂鳥和生
東京経済大学教授　向井　武文
武蔵工業大学建築学科広瀬研究室　矢野　和之
京王帝都電鉄（部次長研修）
順天堂高等看護学校オリエンテーション
川鉄商事課長セミナー
私鉄教育協議会研究会
慶応義塾大学助教授　池井　優
学習院大学教授　大川　章哉
立教大学助教授　井田喜久治
東京工業大学教授　松田　武彦
東京学芸大学助教授　阿部　猛
富士電気東京工場寮監研修会
キリスト友会東京月会（聖書講習）
日本女子大学附属高等学校（高校生活研究セミナー）
東京理科大学物理学科（新入生オリエンテーション）
中央大学教授　井上　達雄
立川スプリング研修会
西八王子パレスボウル（社員教育）
東京YMCA英語学校（合宿授業）
東京学芸大学幼稚園教育学科（一年生研修会）
東京学芸大学理科教育学科（新入生歓迎セミナー）
白梅学園短大教務学生部教職員研修会
都立商科短大助教授　成田　修身
京王帝都電鉄（部次長研修）
東京大学助教授　原　朗
中央大学助教授　高柳　光男
日産宝会QCサークル委員会
立教大学助教授　本間　康幸
日本大学助教授　榛沢　芳雄
東京都立大学教授　野間　三郎
日本福音自由教会教役者会
工学院大学教授　波多江健郎
慶応義塾大学講師　師岡　孝次
第39回大学共同セミナー
大日本インキ化学工業研修会
七葉会ティーチ・イン
慶応義塾大学助教授　橋本　一男
日本大学現象学研究会
慶応義塾大学講師　野呂　影勇
早稲田大学講師　高山　旭
東京経済大学講師　島袋　嘉昌
太平洋興発（接遇者研修講座）
SECTY会（都市問題研修会）
法政大学教授　栢野　晴夫
東京経済大学貿易研究会

専務理事ノート

今夏はいつもの年よりも先生方や学生の皆さんから沢山の暑中見舞をいただきました。セミナー・ハウスの年輪を示すものと感謝しております。お蔭で私も多忙な中にも健康で過すことができました。

今年は専務理事には受難の年です。本号の記事でもご想像いただけるように理事の諸先生には大変ご迷惑をおかけしました。機構の改革や諸規程の制定のため度々理事会を開きました。小さな財団法人ですが経営というものは難しいものです。組織を整備することは大切なことですが、セミナー・ハウスが形式化された管理社会のミニチュア版にならないように外部からの好意ある監視を望みます。

組織を考えるときに、権限の委譲を要請する声があります。任せるのと任せ放しとを混同してはなりません。任せても責任はやはり委譲した上司にあるから、部下に任せていますので、私はいっさいわかりませんというのは責任の欠如であります。また逆のことをいえば、任せられたほうも経過の報告を怠ることは責任感の欠如になります。

受難の二は米国のドル防衛対策によるものです。開館五周年記念募金は一年半でまだ五合目に達したところです。

この一〇ヵ月私は部内の改革問題に忙殺され、募金運動に全力投球できませんでした。ラストヘビー六ヵ月、来春四月まで不況を越えて協力を呼びかけねばなりません。時を得るも、時を得ざるも。

うれしいこともあります。昨今千人会の申込みをしてくださる先生方が多いので感激しております。新しい村山文部次官も木田大学学術局長も早くからの会員です。御二人のご栄進を心から祝福いたします。

日本は国連に「平和の鐘」を贈ったことがあるのですから、ノーマン・カズンズ氏のいわれるように平和の創始者になることに徹したいものです。経済大国日本は消費と行動を自制したいものです。道徳的な精神を高め、聖者への道を開きたいものです。

日本は金持になった経験がありません。お金をどう費うかによって個人でも国家でも品性がわかります。「寄付のわかる財界人」と「寄付のわかる社会人」を多数つくることが、日本が国際社会というコミュニティーの仲間になる重要な要件であろうと思います。

田中正造は「田中さんは怒りすぎる」といわれたそうですが、渡良瀬川の鉱毒事件は公害闘争のハシリでした。われわれも不義非道には、そぼくに怒りたいものです。

東大小石川植物園寄贈の宮城野萩が咲きはじめ、この丘の秋の風情は一入さわやかです。